



Title	Alain 研究 I
Author(s)	原, 亨吉
Citation	Gallia. 1955, 3, p. 33-67
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10428">https://hdl.handle.net/11094/10428</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# Alain 研究 I

原 亨 吉

## *Revue de Métaphysique et de Morale*

に発表された前期の諸論文について

総じて、Alain の著作活動は、これを三期に大別することができよう。そして、時期を降るほどよく知られているのは自然なことであるが、それにしても、début の当時は今日知られることが余りに少い。この破格的な哲学者、殆んど哲学者ならぬ哲学者ともいべきこの人も、始めは甚だ orthodoxe な哲学々徒だったのであり、agrégé de philosophie となって間もない1893年より1907年に至る15年間、有力な哲学雑誌 *Revue de métaphysique et de morale* に多数の専門的な論文を投ずると共に、国際哲学会議などにおいても発言していたのであって、これを第一期とする。第二期は、Rouen の新聞 *La dépêche de Rouen et de Normandie* にいわゆる *Propos* を連載した時期であり、Alain という筆名を世に高くしたこれらの短文は、1903年に始まり、1914年第一次大戦への出征まで続いたが、<sup>(1)</sup> その最初の集録が刊行されたのは1908年、作者40才の時であり (*Les cent un propos d'Alain. 1<sup>re</sup> série. Wolf et Lecerf, Rouen*)、一部学生のための小冊子を除けば、<sup>(2)</sup> これが Alain の最初の著書であった。第三期は、1917年復員してより死に至るまでの、最も多産的、最も偉大、そして最も有名な時期にほかならない。私は以下これらを前期・中期・後期と呼ぶこととしよう。最もよく知られた後期の écrivain としての Alain は、正に、前期の philosophe と中期の journaliste の総合であったと言い得るのである。

ここに Alain の思想を究明しようとするにあたり、第一期から出発するのは、余りにも当然のことである。<sup>(3)</sup> にもかかわらず、この当然のことの未だ行われていないのが現状なのである。世上一般の知識としては勿論、進んで Alain を語ろうとする人においてさえ、真にこの時期を採り上げた例を私は

知らない。この甚だしい閑却は何によるのか。幾つかの理由が考えられぬではないにしても、正当な理由は一つとして存在しないのであり、要するに、Alain 研究は今日なお緒にも就いていないと言うほかないのである。確かに、この時期における Alain と、一般に親しい中期以降の Alain の間には著しい相違があり、一見、別人の観さえ与えかねない。そして、この期の作品がついに再刊されなかった事実は、恐らく作者の意思によるものとして、それらに対する彼自身の消極的な評価を告げるもののようではある。然し、これとて私たちを前期の閑却に誘い得るものでないのは無論のこと、円熟期におけるこの人の思想を理解し、要すれば批判し得るためには、この期の作品を欠くことができない。このことは、今の場合、自明な一般論以上の意味を持っている。というのも、この期の作品は、orthodoxe な哲学論文として、当然論証的だからであるが、加えるに、次の特殊な事情がある。嘗て Alain は、Valéry に対する Mallarmé の影響と並べて、自己に対する Lagneau のそれを「将来の批評家」の解くべき課題としたが、この点の解明のためにも、まず前期の作品を見なくてはならない。否、更に強く言おう。これらの作品を論ずることは、殆んど Lagneau の影響を論ずることに帰着する。それほど、この期におけるこの人の影響は決定的だったのである。

然しながら同時に、以下この期を論ずる私の態度は、中期以降を論ずる場合とは異らざるを得ない。知られることの少いものを対象とするだけに、暫くの間、私の筆は少なからず紹介的・解説的とならざるを得ないのである。

(1) 1903年7月19日より *Propos du dimanche*. 1905年4月24日より *Propos du lundi*. 1906年2月16日より連日掲載の *Propos d'un Normand*.

(2) 1901年 *Collection Les philosophes* の一冊として Delaplane より刊行された Spinoza 論。私は未見であるが、著者自身この旧作を好まなかったことは、例えば、後に Mellottée より再刊された際の或る自筆献辞に徴しても明らかである。曰く、《Je n'aime pas à me rappeler ce travail, ni cette collection etc.》cf. *Bibliothèque nationale: Alain*. 1955. (資料展示会目録) p. 36.

(3) 更に古い documents inédits として今日までに知られているものは、学生期の notes や carnet の類若干であるが、伝記的にはともかく、思想の観点からは採るに足らぬと思われる。

(4) *N. R. F.* septembre, 1952. *Hommage à Alain*. p. 314.

*Revue de métaphysique et de morale* は、Victor Cousin 流の折衷主義によって失われた純正哲学の権威を復興するとの意気をもって、1893年初頭に発足。Armand Colin より隔月に発行されたが、企画編集は、Xavier Léon を中心として、少壮気鋭の者によるらしく、大家の執筆を得ると共に、篤学の士の自由な投稿をも歓迎したのであった（創刊号における *Introduction* を参照）。そして、1892年 *agrégation de philosophie* を得た青年 Alain は、諸所の lycée に教鞭をとりつつ、次の如く、第一巻より始めて、多数の論文をこれに寄せたのであり、新進哲学者としてのその多作は、恐らく、科学哲学の分野における Louis Couturat（同年であるが、Ecole においては二年先輩）に次ぐものであった。

Criton の名をもって

*Premier dialogue philisophique entre Eudoxe et Ariste.* 1893年11月。

*Deuxième dialogue.* 1894年3月。

*Troisième dialogue.* 1895年1月。

*Quatrième dialogue.* 1896年9月。

*Cinquième dialogue.* 1897年3月。

*Sixième dialogue.* 1903年5月。

Emile Chartier の名をもって

*Commentaires aux fragments de Jules Lagneau.* 1898年7月, 9月。

*Sur la mémoire.* 1899年1月, 3月, 9月。

*Matériaux pour une doctrine laïque de la sagesse.* 1899年11月。

*Le problème de la perception.* 1900年11月。

*Le culte de la raison, comme fondement de la république.* 1901年1月。

*Sur les perceptions du toucher.* 1901年5月。

*L'idée d'objet.* 1902年7月。

《*Vers le positivisme absolu par l'idéalisme*》, par Louis Weber. (étude critique) 1904年1月。

*Deuxième congrès de philosophie. Philosophie générale.* (compte rendu critique)

1904年11月。

《*Essai sur les éléments principaux de la représentation*》, par Octave Hamelin. (étude critique) <sup>(1)</sup> 1907年11月。

これらの論文が今日一般に知られている Alain の著作と甚だ趣を異にすることは既に述べたが、繰り返して言おう。この場合名は実を表し、これらの論文が後の作品と異なることは、その署名 Criton ないし E. Chartier が Alain と異なる如くである、と。私たちがここに見るのは、orthodoxe な哲学におけ

る若き選手としての Alain であって、そのような哲学の内部において古いものへの批判はあっても、そのような哲学自体に対する疑惑の影は毫もない。いかにも、当時における Alain が全くこれに尽きたのではない。Dreyfus 事件を契機として俄かに政治への関心を高めた彼は、いわゆる *Universités populaires* の運動に参加、また、1900年には、勤務地 Lorient の急進的な新聞に文を寄せたのみか、——Alain の名はこの時に始まる——自ら運営の枢にさえ立つに至った。そして、*Revue de métaphysique* における上記の論文中、*conférence populaire* と謳われている *Le culte de la raison* は、思うに、*Universités populaires* における演説ではあるまいか。然しながら、私はすべてこれらのことを目下の問題の外に置く。蓋し、このような側面は決して無視を許さないとしても、それが充実した意味を持つのはなお将来のことだからであり、その時に至って振り返ればよい。今回の私の対象は *Revue de métaphysique* 所載の論文群に限られるが、それらは、上的一篇を除き、悉く「時代を忘れつつ」(*1<sup>er</sup> dialogue. Rev. p. 521*)<sup>(2)</sup> 書かれているのであり、また、それらの間にあって、この *conférence populaire* の思想的価値は言うに足りないのである。

(1) すべてこれらは甲南大学所蔵の九鬼文庫を見せて頂いたものであり、ここに故九鬼周造博士および甲南大学図書館に対し、衷心より感謝を捧げる。

なお、前記 *Bibliothèque nationale* の目録にも、また *N. R. F. «Hommage à Alain»* 中の *bibliographie* にも、上記のほか、1901年7月発表のものとして *L'éducation du moi* が記載されているが、なぜか私はこれを見出し得なかった。*(Revue de métaphysique* の1952年4-6月号 *«Lagneau et Alain»* 中の *bibliographie* には、この記載がない。) 然し、1900年の第一回国際哲学会議 (Paris) において Alain がこの題の下に発表を行ったことは事実であり、その *résumé* だけならば、同誌の会議特別号における経過報告中に記載されている。

次に、1904年の第二回会議 (Genève) においては、Alain は *Rapports entre la science et l'action* と題する発表を行い、上記 *compte rendu critique* 中に自らその *résumé* を与えているのみならず、同誌上における全文発表を予告しているのであるが、私はこれも見出し得なかった。上に挙げた三個の *bibliographie* のいずれにも、これに関する記載はない。思うに、発表は中止されたのであろう。

(2) 以下この雑誌に関しては、前頁の表その他 *contexte* によって年度の明らかな場合、これを省略する。頁数は通年のものである。

これらの諸論文は、なお未熟なものを伴うとはいえ、*Revue de métaphysique*

の如き雑誌が受け入れ得たものであり、作者の強い思索力を示している。然しながら、人もしここに、Lycée Michelet における Alain の師 Jules Lagneau の思想を一度親しく知るならば、これらの論文を見る眼は一変するであろう。この師の名が表に現われているのは一度に過ぎないけれども、全論文がこの人の指導の下に成ったと言い得ることを知るからである。いかにも、Lagneau より Alain への強い感化の存在は夙に知られている。然し、粗い知識としてではなく、当面の諸論文によって委細を知る時、聞きしにまさる事実に驚かざるを得ないのである。

この師弟の関係は美しい。人も知る如く、Alain はこの師に対して最大級の讃辞を惜しまなかった。そして、この師を「私が出会った唯一の偉人」(*Souvenirs concernant Jules Lagneau*, p. 7) とした彼自身は、その最大の弟子であった。Lagneau が Alain を作り、そして Alain が Lagneau を世に教えた、と言っ  
ては些か言葉が過ぎるにしても、そこに大過はないのである。例えば、終生 Alain を養った Platon も Spinoza も Lagneau より教えられたものであるのみか、少くとも前期を通じ、Alain がこれらの先哲を見たのは師 Lagneau の眼を通してであったし、他方、師の遺稿の整理発表に努めると共に、師について最も屢々、また最も深く語ったのは Alain であった。ただ、この際充分注意すべきことに、彼が師を語ったものとして恐らく最もよく知られている前記 *Souvenirs* は、その作者が師より長く生き、師を超えた——少くとも或る意味において——後年の立場より書かれたものであって、師の直接的な影響の下にあった当時の様を如実に伝えるものではないのである。

こうして、前期における Alain の諸論文を論ずることは、殆んど Lagneau の影響を論ずることに帰着するのであるが、これは Lagneau その人についての知識を前提する。然し、この人自身なお世に知られることが比較的少い。故に、私は以下暫くこの人について述べようと思うのである。

Homme «capable de vivre ce qu'il enseignait jusqu'à en mourir» <sup>(1)</sup> —— ここに Lagneau について記すにあたり、伝記に深く立ち入るつもりはないけれども、Léon Letellier が師に捧げたこの言葉の真実だけは伝えるに努めねばならない。

「travail と souffrance に終始した」<sup>(2)</sup>と言われるこの哲学者、そして、著書は残さなかったが、教えを受けたすべての人に欽仰されるこの哲学者は、1851年8月、Metzにおいて、蠟燭の製造を営む中産階級の家庭に生れた。Alainはこの人の虚弱を極力否定するのであるが、幼時における大病が體質をも損じたことは事実であるらしい。生地のlycéeを卒業後、1869年、Ecole normale supérieureを志して上京したが、普仏戦争が勃発するや、直ちに義勇軍に投じて故郷の防衛に参加。Metzの陥落後は、敵線を衝いてLilleに走り、Faidherbeの軍に加わった。そして、この間の行動が後にAlainに与えた感銘については、*Souvenirs*中に詳しい。「細心を極めた思想家」の姿と「遊撃隊長」の姿が脳裡に入りまじる、と彼は記している(pp. 25-6)。ここに早くも、penséeとactionという中心問題が劈面を示しており、Alainの見るLagneauは、両者の対立を止揚し得た人なのであった。けれども、その後、外面的にはこの人からactionが失われていったことも事実である。1872年Ecoleに学んだ彼はJules Lachelierに愛せられ、学友からはクラスの良心を代表するもの(3)(une conscience du dehors)とも見られたが、余りに内省的であって課された答案も成り難かったと伝えられる。思うに、réussir ou ne pas réussirよりも、あの《être ou ne pas être, soi et toutes choses》(4)という根本問題が早くも萌していたのではあるまいか、——未だ明確な観念には遠くとも、深く妖しい感情として。そして、外面的にactionが失われたとは、即ち、actionが内面化されたこと、更にはpenséeそのものがactionとされたことにほかなるまい。そしてこれは、いずれ見る如く、この人の哲学が一切を「actionの相の下に」見るものだけに、頗る重要なことである。Lachelierの影響についても、後に触れよう。

1875年agrégation de philosophieを得てLycée de Sensに赴任。77年同校のdistribution des prixに際してのdiscoursは、今日に伝わる彼の最も古い作品であると共に、道徳を論じた数少ない文章の一つとして、無視し得ぬものを含んでいる。次いでSaint-Quentinに転じた後、79年1月、Paul Janetによる『短論文』の翻訳に因んでSpinozaを論じた文章を*Revue philosophique*に発表。更にNancyに再転の後、80年2月、Aristoteに関するBarthélemy Saint-Hilaire(5)の著書に対する書評を同じ雑誌に寄せたが、*De la métaphysique*

と題するこの文章は、単なる批評に止まらず、己が哲学上の抱負をも併せ述べた重要な文字であり、そこには既に後年の Lagneau の全貌が美しく素描されているのである。

1883年、健康を憂える友人の勧めを容れて、一年の休暇をとったが、その間ますます Spinoza に沈潜。そして、この時における彼の documentation については興味深い逸話が伝わるが、<sup>(6)</sup>後に遺稿として発表されたこの時の手記 *Quelques notes sur Spinoza* (*Revue de métaphysique*. 1895年7月号)には、*érudition* の迹は全く見られない。もって学風の高さを思うべきであろう。教室において彼の最も好んで用いた *texte* が Platon と Spinoza であったこと、但し、前者に対する全面的傾倒と異り、後者に対しては対決の態度であったことは言うまでもない。彼には Spinoza 論執筆の意図があった。<sup>(7)</sup>然し、短命はその実現を許さなかったのである。

翌1884年、Paris 近郊の Lycée Michelet (当時 Lycée de Vanves) に哲学の講座が設けられたのを機に、Lagneau はここに迎えられた。そして、彼の名を高くしたのも、主としてここにおける名講義であった。理解し得た青年は少いであろうが、すべての青年に神託の如く響いたに違いないその講義は、どのようなものであったか。これに関する少なからぬ証言中、拙稿本来の対象に属しながら知られることの最も少いものとして、*Commentaires aux fragments de Jules Lagneau* の冒頭に見る数行を引くが、他の人の証言もまたこれを *confirmer* することを言い添えておきたい。「Pas de déductions abstraites et inflexibles ; pas de formules très générales et très ambitieuses ; mais une sorte de micrographie spirituelle ; une analyse infatigable et interminable, des retours continuels de la pensée sur elle-même, tout cela accompagné du sentiment constant de l'erreur inévitable, ou si l'on veut du sentiment de la richesse de l'être et de la pauvreté de nos formules, telle était l'épreuve à laquelle étaient soumis ses auditeurs, et de laquelle ils sortaient plus modestes, plus prudents et plus courageux.» (*Rev.* pp. 449-50)他方、Lagneau 自身による次の述懐もまた重要である。「Chaque année je réalise une sorte de progrès à rebours : quand j'ai débuté dans l'enseignement de la philosophie, j'arrivais à peu près à la fin du programme ; maintenant je ne peux même plus venir à bout de la Psychologie.»<sup>(8)</sup> 実際、後



年の講義の主題は、主として「心理学」の方法論と認識論（知覚論および判断論）に限られていたらしく、神についての有名な講義は、Alain に従えば、Letellier の願いによるものであった（*Histoire de mes pensées*, p. 26）。そして、すべてこれらのことには、既に根本的な問題が潜んでいる。

今は然し、晩年における意味深い一事件について記さなくてはならない。Paul Desjardins を主唱者とする Union pour l'action morale の運動に関するものである。Lagneau は、Desjardins が1891年末 *Journal des débats* に発表した文章——後に *Le présent devoir* と題せられた——に共鳴し、その筆者と交るに至った。そして、この人の依頼により、運動のための綱領として書かれたのが *Simple notes pour un programme d'union et d'acion* <sup>(9)</sup> である。然しながら、その後彼は運動の実情に反省を余議なくされ、92年末には早くも完全に身を引くに至ったのである。この行動の哲人を行動から退かしめたものが何であったかは、更に研究を要することであるが、最も根本的なものは、この運動の多分に政治的な性格であったと思われる。彼にとっては、action は personnelle なものであり、union は厳しい規則を前提するものであって、政治が志す如く「外部によって内部を変える」ことは、精神の弱さを示すものにほかならなかった。Alain の回想によれば、嘗て Lagneau はこの運動を評するに「思想が欠けている」との一言をもってしたとか（*Souvenirs*, p. 129）。然し、ここにおける Lagneau を理解するためには、畢竟この人の全体を知らねばならない。意味深い事件と言った所以である。

けれども、思索と講義の努力は、たださえ強からぬ彼の健康をついに奪った。Letellier に対する次の告白はこの頃のものである。《J'ai souffert pendant toute mon existence ; je pourrais compter les rares journées où la douleur ne m'a pas arrêté de longues heures.》<sup>(10)</sup> 然し、注意しなくてはならない。ここに言われる「苦しみ」を単に肉体のものと解してはなるまい。寧ろそれ以上に、彼が *Simple notes* に記し、また神に関する講義において強調した精神の苦しみ<sup>(11)</sup>、即ち、自己の不完全の自覚によるものではないのか。彼はまた、《Ma vie [...] sera ce qu'elle peut. Je ne lui demande rien ; je n'attends rien d'elle. Il y a longtemps que je n'existe, que je ne vau le peu que je vau, que par le désespoir, qui est ma seule force et mon seul fond.》と書いているが、（1893年1月2日附

Desjardins 宛書簡)』この《désespoir》もまた何ら消極的なものではなかった(44頁参照)。母を失って後は殆んど横臥の状態にあったが、《Il vivait difficilement, mais il vivait harmonieusement.》と Alain は記している (*Souvenirs*, p. 17)。然し、末弟の死は最後の一撃であった。彼はその後を追うかのように、1894年4月、43才をもって天逝したのであった。

*Revue de métaphysique* は次の如き nécrologie を掲げた。無署名の短文であるが、ほかならぬ Alain の手になるもの、少くとも彼の原稿によるものと考えられるのであり、注目すべきことに、génie philosophique のところ、Alain は Génie とのみ書いていた<sup>(12)</sup>のであった。《… Sans avoir rien publié, Jules Lagneau était déjà chef d'école; déjà, dans l'esprit et le coeur de ses disciples et de leurs amis, s'ajoutaient, à la vénération que la sainteté de sa vie inspirait à tous, l'admiration enthousiaste que commandait un véritable génie philosophique. Sa modestie n'a jamais désiré plus que cette gloire cachée. Tout entier à ses élèves, épuisé depuis longtemps par cette tâche redoutable, philosopher dans une classe de philosophie, il n'a jamais eu l'espoir de pouvoir donner au public la grande oeuvre qu'il méditait. C'est à ceux qui l'ont aimé, et auxquels il a donné toute sa pensée, de faire qu'il occupe, après sa mort, parmi les plus profonds philosophes de notre temps, la place qu'il aurait dû avoir pendant sa vie.》(*Rev.* 1894年5月号。supplément.)

- (1) *Bulletin de l'union pour l'action morale* 1894年9月号における Léon Letellier の記事より。《Célèbres leçons et fragments de Jules Lagneau, p. 3》における引用による。なお、Lagneau を世に知らせるにあたって Alain と功を分つこの人は、漁業や遠洋航海に従事の後、30代にして Alain と入れかわりに Lagneau に師事したのである (*Souvenirs*, p. 77 および本稿46頁註1参照)。
- (2) 同上。
- (3) *Annuaire des anciens élèves de l'École normale supérieure* 1895年度における J. Pacaut の記事。
- (4) Alain が屢々引用したこの句は、*De l'existence de Dieu* の結尾をなしているが、それは本来、一聴講者の記憶に基づいて *Fragment 90* が転用されたものにほかならない。
- (5) *De la métaphysique, sa nature et ses droits dans ses rapports avec la religion et avec la science, pour servir d'introduction à la métaphysique d'Aristote.*
- (6) 前記 Pacaut の記事によれば、このとき Lagneau はヘブライ語を修め、また、

知られることの少い多くの書物——*judaisme* に関するものであろう——を渉猟したが、すべてこれらは、彼が自ら微笑しつつ語ったところによれば、「『エチカ』の解釈において未だ指摘する人がなかったらしい二三の誤謬を避けるため」であったと。

- (7) *Notes* の発表者による註 (*Rev.* p. 375) 参照。
- (8) Letellier に対する晩年の言葉。出所(1)に同じ。
- (9) 1892年8月 *Revue bleue* に発表の上、94年4月 *Bulletin de l'union pour l'actin morale* の巻頭に掲げられた。即ち、既に訣別の後である。
- (10) 前記 Letellier の記事。
- (11) «Nous voulons [...] enseigner la perpétuité nécessaire de la souffrance, expliquer son rôle créateur.» (*Simple notes. Célèbres leçons et fragments*, p. 42.) そして、このことは神に関する講義において実行されたと言い得る。63頁を参照。
- (12) «... j'avais employé le mot Génie sans aucune épithète ; mais les philosophes d'institut écrivirent à la place de ce mot ambitieux une périphrase assez plate [...] Je veux gagner ce procès-là.» (*Souvenirs*, p. 98)

以上の事実を単なる事実に終らせぬためには、この人の内面に入らねばならないが、私は徐ろに進みたい。そして、さきに一言した重要な論文 *De la métaphysique* について述べるには、今が好機と思われるのである。

この論文の後半において己が哲学観を述べた Lagneau は、「théoricien du subjectif」である Platon に組し、「théoricien de l'objectif」である Aristote を斥ける。Platon の idée は、彼によれば、Aristote の非難した如く超越的なものではなく、その真意においては精神に内在する。但し、それは同時に事物のうちにある、とも言わなくてはならない。事物とは既に私たちの精神によって構成されたものなのだから。言うまでもなく、これはまた Kant の立場であり、Lagneau の知覚論は正にこの立場に立つもの、というより、独自の分析的な方法によって、このことを具体的に示そうとするものにほかならない。然しながら、Lagneau は畢竟この立場には止まり得ない人であった。精神は事物を通過して自己に帰る。Aristote の *métaphysique* は *physique* の上ではなく後のもの、即ち *physique* の延長にほかならぬと彼は言う。そして、真に *physique* の上のものと彼の見る Platon の *dialectique* を、彼は «une psychologie rationnelle et morale» と規定し、「une étude analytique des choses dans l'esprit, de la connaissance qu'il en prend, de l'explication qu'il s'en donne, conformément à sa propre nature» と敷衍するのであるが (*Célèbres leçons*

(1)  
*et fragments*, p. 24), これはまた彼自身の志したものにほかならぬこと、後に詳述するとおりである。《rationnelle et morale》——然り、Lagneau は rationaliste であると共に、徳義の人であった。「action の相の下に」との前述の方式は、自然界における作用としての action をも容れるとはいえ、<sup>(2)</sup> 重点は飽くまでも精神の action にある。もはや pensée に対立する action ではなく、pensée における action、否むしろ pensée という action があるが、この人にとって、action morale はそれらの間の一種ではなく、それらすべての prototype とされたのである。そして、今 idée の实在性について «cette réalité n'est rien hors des actes toujours provisoires qui la posent.» (p. 26) と言う時、そこには同時に、彼にとっての道德の原理が語られているのであるが、このような立場は、既に1877年の discours 中にも看取される。<sup>(4)</sup> 従ってまた、Alain の伝える後年の言葉 «Il n'y a pas de vérité absolue, c'est notre pain quotidien.» (*Commentaires. Rev.* p. 371) にも、決して pragmatisme の類ではなく、烈しい idéalisme を見なければならず、また、さきにいわゆる subjectif の意味も、畢竟 moral と言うに等しいと考えねばならない。なぜならば、«Il n'y a pas de connaissance subjective.» (*Leçon sur la perception*, p. 120) なのであるから。

然しながら、次の点もまた注意を惹く。Lagneau は、Kant の批判哲学の劃期的な意義を認めつつも、その不徹底を衝くのである。曰く、«Dans l'ancienne métaphysique, la raison pure se subit et s'ignore; dans le kantisme elle se connaît, mais empiriquement, et, ne s'expliquant pas, continue de se subir.» (p. 29) いかにも、Kant の不徹底を云々することは、当時必ずしも特記すべきことではなかったであろう。然し、上の言葉は依然として特色あるものであり、事実、彼が知覚や判断についての講義を越え、神に関する講義まで進んだのは、この「純粹理性の自己説明」を求めてのことなのであった。

ところで、当面の論文における «Le philosophe de Platon n'est pas un savant, c'est un pédagogue.» (p. 29) という句は、思想家としての Lagneau より教師としての彼に私たちを送るが、既に Alain の証言 (39頁) は、この人の講義が «actes toujours provisoires» に支えられていたこと、寧ろ、そのような actes 自体であったことを告げていたのではないか。しかも、他面、注目すべきことに、あの «progrès à rebours» につれて、この人が道德を論ずる

ことは稀となったのである。後年の講義が主として方法論や認識論に限られたことは、これを意味している。そして、この徳義心の強い人を Union pour l'action morale から退かせた理由も、畢竟同じところに発したのではないか。事実、彼は Desjardins に対し、道徳を説くことの非を繰り返して述べている。例えば、*«Je crois inutile, parfois même fâcheux et dangereux de prêcher le détachement autrement qu'en le pratiquant soi-même.»*<sup>(5)</sup> の如く。恐らく、晩年の彼が教室において道徳を論じた唯一の例は神に関する講義であり、また、そこにおいては正に détachement が説かれるのであるが、然し、日々の実践における彼の détachement は多くの人の等しく認めるところである。再び *Commentaires* に見る Alain の証言を伝えよう。*«Donner gratuitement, à tous les degrés et dans tous les ordres, telle est la vertu ; et l'on peut dire que Lagneau la pratiqua absolument ; car jamais il ne fut satisfait ; jamais il ne se reposa ; jamais il ne renonça à user ses forces et sa santé sans espoir ; jamais non plus il n'omit une acte de charité pratique possible, et cela sans le soutien d'un principe ou la vision même d'un but à atteindre.»* (*Rev.* p. 472) そして、Alain が、このように行為自体に支えられた行為の無償性にいわゆる *«désespoir»* の真意を見たのは (同頁)、思うに正しい。

(1) 以下、単に頁数のみを記するものは当書のそれを指す。

(2) 例えば、*«La pensée est une action qui a toujours pour objet une action.»* (*Perception*, p. 158) この場合、後の action は事物間の相互作用を意味している。

(3) Lagneau は美学を築くに至らなかったけれども、美をも action の観点より見たことに注意に値しよう。*«Le sentiment du beau n'est que le sentiment de l'activité que l'esprit trouve le moyen d'exercer dans les sensations.»* (同上, p. 147)

(4) 例えば、*«Ne nous enfermons pas, ni personne, dans notre vérité ; laissons-la ouverte, inoffensive, prête à recevoir l'éternel appoint que lui assure notre éternel effort, etc.»* (p. 18)

(5) 日附不明。 *Célèbres leçons et fragments*, p. 5 における引用による。

さて、Alain は、1886年 Caen において baccalauréat ès lettres を得た後、Ecole normale supérieure を志して、88年 Lycée Michelet に入学、ここに Lagneau との邂逅が始まり、直ちにその忠実な disciple となったのであるが、彼がこの人より受けた講義は、心理学の方法論を序として、前期は知覚論、

後期は判断論であった。そして、彼は始めて「精神を巨雲の中に見た」(Sovenirs, p. 16) のであるが、彼の受けた講義は以上に尽きるらしい(同書 pp. 74-5)。神に関する講義は彼の卒業後(1892-3)のものであるのみならず、彼がその筆記ノートに接したのは更に遅く、*Souvenirs* 執筆中のことであった。<sup>(1)</sup>

以下、Lagneau の著作について述べねばならないが、生前の発表は既に略伝中に記したものに尽きる。即ち *compte rendu* 2篇と *Union pour l'action morale* のための短文1篇に過ぎない。他はすべて死後の発表にかかわるものであり、そして、この仕事の中心には、殆んど常に Alain があつたのである。

その最初に立つ *Quelques notes sur Spinoza* については、既に述べた。そして、明記こそされなかったが、この筆を進めた者も既に Alain であったと考え得る十分な根拠がある。次いで彼は、同じく *Revue de métaphysique* の1898年3月号に、90の断章より成る重要な文献 *Fragments de Jules Lagneau d'après ses manuscrits* を発表。ひき続き、これに対する註釈を試みたことは、前記の作品表中に見られるとおりであるが、その註釈の間には、Lagneau の講義の部分的な *rédaction* も挿入されていたのである。そして、遺稿の発表はここで中断され、爾後20余年の空白が来るのであるが、その間ただ、Pierre Tisserand が、同じ雑誌の1911年5月号に、Letellier のノートに拠って、神に関する講義の詳細な紹介を行ったことは記憶されてよい。(Dieu dans la philosophie de Jules Lagneau. pp. 312-51) 但し、要するに解説、余りにも忠実な解説であつて、教えられるところは少いのであるが。

漸く1924年に至り、Alain は Desjardins その他の協力を得て、*Ecrits de Jules Lagneau réunis par les soins de ses disciples* を Nîmes の imprimerie coopérative La laborieuse<sup>(2)</sup> より刊行。従来発表されたもののほかに、15の *Fragments*、諸所の lycée における discours 若干、Desjardins 宛の書簡約20通などを含むものであつた。更に翌25年、Alain の *Souvenirs concernant Jules Lagneau* (Galimard) と並んで、Letellier が、神に関する講義の *rédaction* を *De l'existence de Dieu* と題して Alcan より上梓。続いて26年、他の3講義 *Evidence et certitude*, *La perception*, *Le jugement* の *rédaction* が、*Célèbres leçons de Jules Lagneau* の名の下に La laborieuse より刊行されたが、これは Letellier その他のノートを Alain が校閲したものであつた。

今日までに知られている Lagneau の著作は以上の如くであって、その大部分は、1950年、Bibliothèque de philosophie contemporaine の一卷として P. U. F. より刊行された *Célèbres leçons et fragments* に集録されたが、*Notes sur Spinoza* の欠けるのは惜しい。全集の編纂は目下進行中と聞く。

(1) この講義のノートを Alain の許に持参したのは、—— Alain は *Souvenirs* において名を挙げずに語っているのであるが (p. 76 以下)——*Letellier* その人と考えられる。

(2) 1921年以降における *Libres propos, journal d'Alain* の印刷所。

Lagneau の思想に踏み入るに先だち、まずその重要作品の間に perspective を設けるならば、今日に伝わる四講義中、*Evidence et certitude* 以外は、正に *Célèbres leçons et fragments* における配列の順序、即ち、*La perception, Le jugement, Dieu* の順序に置かれねばならぬことは明らかである。<sup>(1)</sup> 蓋し、前のものは後のものを己が根拠として指向し、必然的にそれを予告するからである。即ち、ここに Lagneau の哲学は、知覚という最も卑近な経験の分析より出発して、そこに既に働いている悟性の営みを示し、次いで、悟性の判断作用を反省して、そこに精神の自由の潜むことを教え、更に、自由の根源を探って神に到達するのである。他方、*Evidence et certitude* は、一体をなすものとしてのこれら三講義の内容を、題名の示す二重の観点より照し直したものと言ってよく、従って、さきの *De la métaphysique* と共に、この人の哲学の興味深い résumé を与え得るのである。

évidence は「真理の表徴」であるが、では、certitude は évidence に由来するのか。一見無用なこの問は、然し、Lagneau にとって根本的なものであった。そして、《clarum per obscurius》(*De la métaphysique*. p. 32) を信条としたこの人は答える、すべての certitude が évidence から来るのではない、前者の領域は后者のそれより遙かに広い、寧ろ深い、と。例えば、個別的な真理の認識は真理そのものの idée を前提するが、この idée 自体は決して évident なものとして与えられてはいない。それは精神の「自由な」行為によって措定されるのであって、この行為が精神に certitude を与えるとされる。従ってまた、certitude には種々の段階が考えられるけれども、《certitude de fait》は固より、《certitude intellectuelle》も、なお完全ではない。それらを含みつ

つそれらを越える《certitude de réflexion ou philosophique》に至って始めて自足し得るのであり、そして、これは《à la fois libre (morale), nécessaire (intelligible), et naturelle (sensible)》(p. 105) であるとされるのであるが、然し、この三面の綜合が最も積極的に試みられたのは *Leçon sur Dieu* においてであり、そこでは、難解な argument の末に、《Nous concevons précisément le degré de certitude que nous méritons.》(p. 303) という美しい言葉が述べられるのである。

*Fragments* もまた、これら後年の諸講義と同期のものに相違ない。その内容は概ね講義と対応する。即ち、そのかぎりにおいて、両者は要約と細説の関係に立つが、ただ、「心理学」の方法論に関する断章などはこの平行を破る。これに対応すべき講義は今日に伝わらないからである。

さて、Alain が聴講した知覚論と判断論は Lagneau の認識論を形作るものであるが、既に一言した如く、前者は知覚という一見単純な経験における pensée の積極的な活動の闡明、また、後者の眼目は判断における意志の参加、更には自由の教えである。そして、両者共に Alain の思想の根幹をなすことは夙に人の知るところであるが、それは Lagneau の initiation によると断じてよいのである。けれども、自叙伝における次の回想は、二十才の彼をまず打つたものが前者、——その doctrine であると共に、そこにおける Lagneau の態度であったことを告げている。《J'ai appris de lui un genre d'analyse qui adhère à l'objet et qui est de pensée pourtant. Ses recherches sur la vue, le toucher, l'ouïe, m'ouvrirent un monde. Je connus que l'univers des choses est aussi un fait de pensée.》(*Histoire*, p. 24) idée は事物に内在し、事物は pensée に貫かれている、或いは「essence が existence を担う」というこの原理、——当時の彼にとって全く意外なこの啓示の眩さに、彼は眼を蔽おうとしたほどであったが(同頁)、拒もうとして拒み得ぬことを知った時、——Alain はこの時に始まると言っただけである。

然し、*Souvenirs* に至ってさえ、《La philosophie de Lagneau était premièrement et je dirais peut-être uniquement une théorie de la perception.》(p. 115) と彼が言う時には、若干注意を要する。ここに言う《théorie de la perception》とは、思うに、もはや知覚論に止まらず、広く判断論をも含むものと考えね



ばならない。いかにも、彼が意志の教えに眼ざめたのは Ecole に進んで後と  
 言われるばかりか (*Histoire*. p. 41), *Revue de métaphysique* 所載の諸論文にお  
 いてさえ、意志の主體的な把握は皆無に近いのであるが、<sup>(2)</sup> 1925年の *Souvenirs*  
 は、既にこの段階を越えて久しいからである。とすれば、彼が師の哲学をな  
 おも「知覚の理論」に帰そうとするのは、いわゆる «L'heureux commence-  
 ment est la moitié de l'oeuvre.» なるが故にほかなるまいが、それにしても、  
 Alain のこのような態度は、依然として、「Lagneau を自分に引き寄せる」  
 (*Souvenirs*. p. 83) ものに違いない。師の絶作 *Leçon sur Dieu* は彼を困惑させた。  
 私もまた、この難解な講義を前にして甚だ困惑する。知覚—判断論との間に  
 感ぜられる飛躍は決して少なくない。然し、この懸隔はかえって、ここに述  
 べられる思想の久しい潜在を告げるはずであり、——そう考えなくては、  
 この飛躍は理解されない——Lagneau がこの講義をもって己が *testament*  
*philosophique* としたことは、<sup>(3)</sup> 十分に首肯されるのである。Alain はここにお  
 ける *abstrait* なもの、*dialectique* なものに反撥した。私自身は、半ばそれを  
 不満とし、半ばそれに賛同する。というのは、私はこの *dialectique* の深さ  
 に惹かれるが、同時に、或る重大な論過をもそこに見るからである。

なお、講義の *rédaction* にまつわる疑問についても、この際一言しなくて  
 はなるまい。 *De la métaphysique* や *Simple notes* など、生前に公表された文  
 章は、彫琢されて密度高く、美しい。そして、これは未だ誰も言わなかった  
 ことであるが、言うに値することである。然し、これらと全く異り、「即興  
 的」でさえあったと言われる講義については、現行の *texte* はどこまでそ  
 の実相を伝えるものか。第一、それはいつの講義なのか。 *Leçon sur Dieu* 以  
 外にはこれに関して何ら記載がなく、他方、Lagneau は毎年四五ヶ月を知覚  
 論にあてたとされるのであるが (*Commentaires*. *Rev.* p. 449), 現行の *Leçon sur*  
*la perception* の発表にあたり Alain が附した註 (p. 129) より判断すれば、彼  
 自身が聴いた講義は更に「二三年前」のものであったかと思われる。そし  
 て、この方が «bien plus étendue, plus riche de matière, mais aussi moins bien  
 composée» であったとされるのは、他の多くの場所における彼の言葉と一層  
 よく合致するし、また、彼が自ら *Commentaires* 中に挿んだ部分的な *rédaction*  
 もこれを支持するようである。そこにあつて現行の *texte* に欠ける語句もか

なり見られるからである。然し、これらの相違が講義の本質まで響くものでないことは、Alain もこれを認めている。<sup>(4)</sup>

- (1) *De l'existence de Dieu* は、この édition において *Leçon sur Dieu* と改題されており、私も以下これに従う。改題の理由は、後述するところ (60頁) より自ら理解されるであろう。
- (2) 1904年の *Rapports entre la science et l'action* (résumé) が唯一の例外をなしている。
- (3) *Leçon sur Dieu* に対する avertissement (p. 221) を参照。
- (4) 更には綿密な原文批判の望ましいことは言うまでもないが、現状においては資料が殆んどない。ただ一つ、恐らくは *Célèbres leçons* 編集時のものであろう、Alain の自筆による *Leçon sur la perception* の manuscrit の存在が伝えられており (Bil. nat., op. cit. p. 19), 目下の問題に関する鍵を含むかと思われる。実は、本文に述べた Alain の註は、遺憾ながら文意が曖昧なのであって、「二三年前云々」との解釈も私の判読たるを出ない。要するに、今はただ問題の所在を示し得るのみである。

今や、Lagneau の哲学についてやや詳しく述べなくてはならない。まず、これまでの敘述中に間々「心理学」という語が現れていたが、これを現代の立場より考えられぬように。実際、Lagneau は自己の哲学を、——少くとも、その根幹をなす部分を、psychologie と称したのであるが、それは、今日私たちがこの語によって考えるものとは甚だ異なる。この語のこのような多義性は歴史的な原因によるが、Lagneau がこの語をもって呼ぶものは、要するに、既に *De la métaphysique* において提唱されていた「事物ではなく精神の」(p. 30) 哲学の謂にほかならぬと考えてよい。《La psychologie n'étudie les objets qu'en tant que pensées, ou plutôt elle étudie l'acte même par lequel on les pense.》(Fr. 8) そして、もはや事物の哲学はあり得ぬとすれば、——Lagneau にとっても、また Alain にとってもそうであった——心理学は即ち哲学であると言ってよく、更には形而上学であるとさえ言い得る。なぜならば、——最も簡単に言って——精神こそ絶対者とされるのであるから。《La psychologie dans sa source et son fond est la métaphysique même.》(Fr. 10) そして、すべてこれらのことは、Lachelier の *Psychologie et métaphysique* (1885) を思い起させ、この人の影響を考えさせる。蓋し、Lachelier はこの有名な論文において心理学と形而上学の必然的な関連を説いたからであり、彼の心理学は既に経験科学としてのそれと異っていたからであって、この点、Lagneau は師の衣鉢

を継ぐものであった。

次に、このような心理学における Lagneau の方法は、réflexion analytique ないし analyse réflexive と呼ばれる。そして、Alain がこれを Spinoza に負うものと見ているのは注目に値するし (*Commentaires. Rev.* p. 563; *Souvenirs*, p. 136), Lagneau 自身それを肯定すると思われる言葉もないではないが (*Fr. 13*), 更に明らかな事実は、これまた既に Lachelier の方法だったことである。ともあれ、この場合、réflexion は conscience に対立する。conscience は事実を constater するものであり、また、出発点は正にそこに、——具体的な所与になければならない。然し、réflexion は、単に conscience の即自態に対する向自態であるばかりではない。それは、いわゆる事実問題を離れて権利問題に関するものであり、従って、introspection が事実問題の内部に止まるかぎり、それとは本質的に異ると言わねばならない。そして、この途を進んだ Lagneau は、*«L'homme qui a une fois réfléchi a transformé sa vie; il est impossible que cet acte de réflexion ne pénètre pas jusqu'au fond de sa vie.»* (*Jugement*, p. 214) と言うに至るのである。では、analyse とは? それは必ずしも <sup>(1)</sup>synthèse に対立するものではない。寧ろ、construction に対立するものとして、réduction を意味している (*Fr. 13*)。なぜならば、この心理学は rationnel でなければならないが、déduction には抛り得ない。déduction-construction は抽象的なものについてのみ成立するが、心理学の対象は具体者であり、déduction の起点としての単純な要素はその間に存在しない。conscience にとって単純なものにも、réflexion は複雑性を見出すからである (*Fr. 13*)。こうして、結局、私たちは Alain と共にこう言い得る。analyse réflexive とは *«la recherche des conditions nécessaires d'un objet considéré comme objet de pensée»* (*Commentaires. Rev.* p. 532) である、と。

ここで直ちに言い得る重要なことは、第一、これらの conditions は nécessaires <sup>(3)</sup>なるが故にまた普遍的であり、従って、単に個人的な pensée ではなく、普遍的な Pensée に関係するということである。*«La vraie psychologie n'est pas la description de telle pensée, mais l'explication de la Pensée.»* (*Fr. 23*) 然しながら、第二、この Pensée は更に他の意味においても大書に値するものとされる。蓋し、conditions nécessaires の探究は、前提より前提へと私

たちを遡らせつつ、idées の全体を指向すると見られるからであり、Alain は Lagneau が屢々繰り返した言葉として «L'analyse réflexive a pour objet de retrouver dans un fait de pensée la Pensée tout entière.» を伝えている（例えば *Commentaires*. p. 532）。ここに、Lagneau において著しい「全体」の観念が早くも現れており、また、この観点より、analyse réflexive とは「部分に対する全体の適用」であると言い得るが、Alain の *Commentaires* は、idée 間のこのような implication を寧ろ師以上に強調するのである。ここには Platon の methexis にも通ずるものがあり、後年の Alain は事実その途に進んだ。然し、目下問題としている全体観については、Lagneau にあっても、Alain にあっても、<sup>(4)</sup> «être» との平行関係を持つ点において、Spinoza の影響が一層直接的であったと思われるのである。

- (1) analyse は synthèse に移り得るのみならず、移らねばならぬとされること、追って見るとおりである。今はただ、次の二つのことを附記しておきたい。第一、Lachelier にあっては、この間の移行こそ心理学より形而上学への移行にほかならぬとされていたこと (*Du fondement de l'induction, suivi de Psychologie et métaphysique*. Alcan, 1924. p. 158)。第二、Alain は *2<sup>me</sup> dialogue philosophique* において科学の方法に触れた際、これら両法の間には本質の相違はないとしたこと (pp. 187-8)。
- (3) 必然性を直ちに普遍性と等置することには疑問もあり、Lagneau 自身これを問題としたのみならず、その部分は彼の哲学の中核をなすのであるが(60頁以下参照)、今はそこまで問わず、普遍性の意味を単に形式的に解しておく。
- (4) この点に関し、有名な『エチカ』第2部定理7を最も明らかに指さすと思われるのは、Alain の次の句である。«L'être est un, et par suite tout ce qui est est lié à tout l'être de telle manière que la pensée d'un être suppose la pensée de tous les autres, c'est-à-dire que toute pensée suppose toute la pensée.» (*Commentaires*. p. 533) Lagneau にあっては、これほど簡明ではないが、やはり同様の平行観の存在が考えられる。特に *Leçon sur Dieu* の後半において。

精神の諸機能を列記するなどは幼稚とも見えるけれども、analyse réflexive がこの契機を含むことは Lagneau 自身も認めるところである上 (*Fr.* 98)、私たちにとっても、それは今後のためのいわば見取図を与えるから、ここに Lagneau 自身による分類 (*Fr.* 35) を挿む。

## Trois facultés ou fonctions

		<i>Sensibilité.</i>	<i>Intelligence.</i>	<i>Activité.</i>	
3 degrés	{	Conscience indirecte.	{ Emotion.	Représentation.	Impulsion.
		Conscience.	Passion.	Entendement.	Volonté.
		Réflexion.	Sentiment.	Raison.	Liberté.
		(9 formes de la vie pensante.)			
		Inconscience.	Affection.	{ Sensation.	} Appétit.
				{ Impression.	

これらの terminologie が Lagneau の著作中に終始守られているとは限らぬにせよ、この表は直ちに次の概括を許す。曰く、これらすべての項を甲乙なく論じ得た Alain の豊かさは、到底 Lagneau には望み難いと。今日私たちの知り得るかぎり、この人の思索の対象は主として intelligence と activité の領域にあったが、impulsion への論及は *Leçon sur Dieu* まで待たなくてはならない。sensibilité に関しては、*Fragments* 中に若干の論及あり (70-76)、また、*Notes sur Spinoza* は «omniprésence de l'idée dans l'action» (*Rev.* p. 396) としての sentiment の価値を強調しているが、これらも講義中には殆んど伝わらない。<sup>(1)</sup> 然し、今日私たちの知る講義が全体のいかなる率を占めるか不明である上、この人の天逝を思わねばならない。本質的には *Leçon sur Dieu* に彼の最後の言葉があったとしても、例えば、*Fragments* にいわゆる *histoire naturelle de l'âme* (82, 95) とは何であったか。もしも *Leçon sur Dieu* に説かれる devenir の理論 (第四章後半) でないとするれば、それは着手されるにも至らなかったと見られるのである。こうして、思想の拡がりにおいて Alain は師に遙かに優り、また、その拡がりの内部における関連の周到さに関しても優っている。けれどもまた、これは彼が師の齢を越えた後期のことであって、ここに問題とする前期の思想は、政治に対する関心以外には、完全に Lagneau の圏内にあったと言い得るのである。そして、政治の問題は今回の範囲外にあるが、ただ次のことだけは言っておきたい。政治に対する関心は師弟の分離を来した。然し、この際「政治」という語は殆んど逆説的な意味を持っている。政治に向う彼の携えた武器もまた、師より譲られたものと言ってよい、——磨いたのは彼自身であったけれども。なぜならば、彼もまた「外部によって内部を変えよう」としたのではなく、かえってその本末顛倒

を説いたのであるから。

さて、表に帰り、言うまでもないことながら、ここには juxtaposition ならぬ superposition を、或いは寧ろ hiérarchie を見なくてはならない。三つの degrés は、表記の順に inférieur—supérieur の関係にあり、従って、Lagneau にとって raison は明らかに entendement に優越するが、この際、両者の区別は、夫々の対象によるのみでなく、——但し、対象はいづれも idée と呼ばれるが——また働き方による。《C'est l'entendement qui veut la division et la diversité, la raison ne s'en contente pas : elle ne trouve repos et satisfaction qu'au sein de l'unité qui embrasse tout.》(Fr. 84) そして、Lagneau が *Leçon sur Dieu* まで登ったのは、専らこのような raison の要求によることなのであった。これに反し、Alain が Lagneau 哲学の精髓を知覚論に見たことは、entendement を重視するものにほかならず、事実、後年の彼が明らかに entendement を掲げ raison を貶したことは、人のよく知るところであろう。

然しながら、更に重要なこと、恐らく最も重要なことは、次の点にある。「下位のものが上位のものを支える。然し、上位のものが下位のものを照す。」この美しい方式に Alain 哲学の原理があることは言うまでもないが、これは既に Lagneau が明言し強調していたことであって、この原理の広さと深さを思う時、この一事をもってしても、Alain に対する Lagneau の影響はまことに決定的であったと言わざるを得ない。上向と下向の二重の関連——ここに至って、さきの表中にも、単に hiérarchie ではなく dynamisme を、いな更に、unité dynamique を見なければならぬ。《Le supérieur est dans l'inférieur, mais ignoré. Ex. : c'est par la représentation et par la conception que nous connaissons la sensation, qui n'est pas donnée isolée ; c'est par la mesure et la conception que nous déterminons la représentation. Tout est donc en un sens nécessité, mais en l'autre libre. Nécessité en tant qu'il suppose du donné indéfiniment ; libre en tant que le donné n'explique rien et s'explique par autre chose dans l'autre sens.》これは *Fragments* 中の 1 節 (63) であり、この豊かな原理について今はこの要約しか掲げ得ぬことを遺憾に思う。上文は intelligence に対する原理の適用を与えているが、activité に対する適用は *Leçon sur Dieu* 中に見られよう、——「照す」ことが問題である以上、これは activité に対する

intelligence 自体の介入を意味するが。そして、Alain は更に *sensibilité* の領域にもこれを適用して優れた成果を得たが、その萌芽の如きものは既に *Commentaires* 中にも伺われる (*Rev.* p. 466) ことを一言しておこう。

しかも、この fragment は、おのずから私を先へ押し進める。なぜならば、まず、その前半は知覚に関する Lagneau の講義を素描している。即ち、彼の知覚論は、intelligence に対するこの原理の適用にはかならない。というより、彼がこの原理を見出したのは、もともと知覚の分析によってであったに違いないのである。それのみではない。fragment の後半は早くも自由と必然の根本問題を提出するが、その提出法は同時に彼の解決法をも暗示しているのである。

- (1) *Leçon sur Dieu* 中に僅かに現われる *sentiment* (67頁註4参照) は *Notes sur Spinoza* のそれに対応すると思われるが、*argument* の力を持たない。それに、実は、*sentiment* という語は Lagneau において最も多義的なものの一つであって、*Leçon sur la perception* に見えるものは、明らかに表中のものと意味を異にし、*conscience indirecte* に属する。
- (2) なお、表中において *inconscience* が別個に扱われているのは、*réflexion analytique* の立場より、これを他と同等に見ることを得ないからである (*Fr.* 9, 12)。次節を参照されたい。

さて、Lagneau の知覚論——甚だ綿密であると共に諸講義中最も解し易い *Leçon sur la perception* を、いかに扱ったものか。Lagneau 哲学の出発点をなすと共に Alain に最も強い感銘を与えたこの部門について、読者は詳論を期待されるでもあろうが、実のところ、私はその煩に堪えない。たとえ Alain との関連においてのみ論ずるとしても、要する労に大差はない。彼自身、師の知覚論を援用し、或いは自ら辿り直して倦むことを知らなかったからである。それ故、細部は今後時に応じて顧みることとし、今は最小限の言葉に止めることを許されたい。*conscience* にとっては単純な受動的作用と見える知覚も、*réflexion* にとっては既に複雑な能動的作用であること、純粋な受容性と考えられる *sensation* はかえって抽象的な *fiction* に過ぎず、——まことに必然的な *fiction* ではあるが——従って、これを *primitif* なものと見てそこから出発する経験論は支持し得ないこと。結局、私たちは対象を斯々と知覚するから斯々と判断するのではなく、かえって、斯々と判断するから斯々と知覚

するのであること、——すべてこれらのことを更に説明する要があるのか。知覚における精神の予断は錯覚の現象が雄弁に示すことであるが、知覚の「対象」という観念は、この点に関して最も根本的である。一体、異った感覚に由来する異った表象を私たちはいかにして、また何故に一個の対象に綜合するのか。Lagneau はこれに答えて、対象の観念は既に «être» の観念を前提すること、故に、知覚は既に存在論ないし形而上学を含蓄することを説くのである。さればこそ、彼は学生たちに向かって言った、«En effet, il n'y a aucune raison pour que je vous voie comme des hommes, si ce n'est que je sais que vous êtes des hommes.» と (p. 173)。しかも、いま私が特にこの言葉を引いたのは、それ自体における深い興味のためばかりではない。実は後々のことをも思っていたのである。

知覚の分析の間には、*qualité première* として、当然 *étendue* が現れるが、これに関しては幸い *Fr. 38* に要約がある。「*L'étendue est subjectivement la représentation d'une loi nécessaire suivant laquelle nos sensations sont liées entre elles d'un sens à l'autre et varient en rapport avec le sentiment de l'action musculaire. / Objectivement l'unité représentative du tout des êtres individuels considérés en tant qu'ils se déterminent en s'excluant et par suite en s'exprimant réciproquement. / C'est donc beaucoup plus qu'une possibilité indéfinie : c'est le lien de l'esprit et le lien des esprits.*」従って、*étendue* は——まして *espace* は——「感性の形式」であるより、「感性に適用された思惟の形式と言う方が一層正しいであろう」(p. 175) が、このような *étendue* 観は、既に Lachelier が *Du fondement de l'induction* において強調したもの (第四章) にほかならない。然し Lagneau は、更に時間との対比において次の美しい方式に達した。「*Le temps marque de mon impuissance ; l'étendue de ma puissance.*」と (*Fr. 40*)。 *étendue* の世界においては、私は一地点に至るに多くの途を採り得る、というより、この並列する可能性が *étendue* を作るのであるが、一旦途を選んだ上は私の感覚に一定の系列が与えられ、そこに時間が生ずる、というのであるが、この際注意すべきことに、Lagneau において *étendue* は時間に優先する。蓋し、*étendue objective* の基礎とされる「個物の相互限定」は、彼にとって、存在の窮極原理 («*L'être est un.*») にほかならないからである。——が実は、*étendue* の間



題は、後に Alain の科学観において重大な難点を来すものであるから、時を改めて細論したい。

以上の私の言葉は、Lagneau の知覚論の肉体を与え得ないのは固より、骨骼についてさえ、その一端を示すに過ぎない。この肉体に血を通わせるものは、具体的な知覚の分析であり、それによる *implication des idées* の解明であった。例えば、私たちに事物の存在を教える基礎的な契機として抵抗の知覚が屢々挙げられるけれども、この知覚は果して単純なものか。否、それは既に位置、方向、努力などの観念を前提し、これらの各観念は更に他の観念を、例えば、位置の観念は距離や為すべき運動の観念を前提するのではないか……然し、今この種の分析に立ち入り得ぬ私は、およそ道程を略した結論の力の弱さを知りつつも、Lagneau が長い分析の成果に与えた要約を伝えるに止めなくてはならない。それは次の如きものであった。«*La perception est donc l'achèvement de la représentation et la rectification des données sensibles, qui résultent l'un et l'autre d'un jugement, immédiat et intuitif en apparence, mais fondé sur l'habitude et sur les inférences naturelles, où la sensibilité et la volonté peuvent intervenir, et par lequel nous déterminons quant à l'existence, à l'essence, à la quantité et à la qualité, soit l'objet des données sensibles, soit les données sensibles elles-mêmes.*» (p. 178; *Fr.* 41)

既に記した如く、前期の Alain は師の知覚論を反芻して倦むことを知らなかった。Lagneau の影響は既に処女作 *Dialogues philosophiques* 中にも多数指摘し得るのであるが、師の *Fragments* に対する註釈に至って、Alain はいわば「仮面をぬいだ。」この註釈と、後年 Valéry の詩篇に対して試みられたものとの相違は著しい。後者が原作と註釈の間に大きな距離を感じさせるに反し、目下の Alain にとっては、己が思想を精密化することと師の思想を語ることに何の間隙もない。しかも、注意すべきことに、*Leçon sur le jugement* や *Leçon sur Dieu* に対応する *Fragments* については、註釈者は全く黙して語らないのである。次いで *Le problème de la perception, Sur les perceptions du toucher, L'idée d'objet* の諸篇が続くが、一連をなすこれら三論文は、正に Lagneau 的な——Lagneau のとは言わずとも——知覚論の再建にほかならない。固より、それは変形を含む。然し、変形は未だ物理的であって化学的ではないと

言おうか。従って、Lagneau その人を知る者には価値の半減して映る作品であるが、然し、作者のためにも言わなくてはならぬ、このように再建し得る人は、やがて自ら築き得る人でもあらうと。ただ、以上の諸論文において彼が idées の implication を反復強調する時、否、後期の著作においてさえ、それらの idées はいわば同一平面に止まり、そこに私は単調を感じざるを得ない。entendement の立場を守ろうとする人にはそれでよいのかもしれない。彼は «mon poste d'homme, qui est à la surface du monde» を守ると言う (*Souvenirs*, p. 80)。然し私は Alain の示すような implicatin の発見を「その都度新しい」とは感じ得ぬ者である。

知覚は既に悟性の判断を含んでいたが、悟性は必然性の認識を目指す。そして、このことは、単に科学の準位においてでなく、最低準位まで、即ち判断一般まで降って言われねばならない。«Le jugement consiste toujours à affirmer quelque chose comme vrai.» (*Jugement*, p. 187) 真と判断する、従って必然的と判断するのである。こうして、判断の形式は真理・必然性の idée にあるとされるが、では、判断はその質料と形式の和に尽きるのか。もしそうとすれば、判断は受動的なもの、結局は fatal なものであらう。ここに重要な、しかも微妙な問題がある。

Spinoza の答は「然り」であった。が、Lagneau の答は「否」であった。«Le juge ne ne saurait se confondre avec la sentence.» と彼は言う (*Evidence et certitude*, p. 119)。精神は、真理の idée を持つのみでなく、個々の場合に真理の条件が満されていることを知らねばならないが、この条件が満たされることは決してないと Lagneau は言う。質料は形式に対して決して adéquat であり得ないと。従って、判断は常に facultatif である。«Il y a la reconnaissance, dans ce que nous percevons, de quelque chose que nous croyons devoir y être.» (p. 193) 或いは、Descartes 流に「そこにあることを欲するもの」と言ってもよい。«L'entendement et la volonté en acte [...] sont identiques.» (*Fr.* 67) 質料と形式は判断の条件である。然し、判断の本質は、前者を後者に適用する——敢て適用する行為にあり、そして、この行為において精神は自由であるとされる。なぜならば、この行為は精神自身にのみ依存するのであるから。

しかも、この行為を自覚する時、精神は既に悟性より理性に移っていると言わねばなるまい。蓋し、悟性は本来 «miroir passif de l'être» (*Dieu*, p. 263) なのであるから。

自由と必然の問題に対する Kant の答は周知のとおりである。即ち、それは、一方において現象と物自体、他方において理論理性と実践理性、この二重の区分の上に立っている。然し、「理性に二つはない」と Lagneau は言うのであり (*Dieu*, p. 257), 事実、「判決」ならぬ「判事」に関するかぎり、理論理性と実践理性の間に本質の相違があろうか。Lagneau においても結局は後者が前者に優越するのであるが、両者の相違は *pureté* の差と言うべきである——これらの問題が詳論されるのは *Leçon sur Dieu* に至ってであるけれども。

然し、*Leçon sur le jugement* も、この大きな岐路に立って、前述の議論に止まってははいない。彼は Spinoza の認識論を具さに点検し、認識を受動的なものとするこの理論が肯定・否定・懐疑・誤謬などのいずれをも説明し得ないことを示す。この点に立ち入る暇のないのを遺憾とするが、この spinoziste が今や Spinoza を去って Descartes に就き、懐疑の創造的な価値を強調することだけは記しておかねばならない。否、それのみではない。一般には、彼は懐疑を口にするに Alain より遙かに稀であったけれども、これを実行する力において、少くともその深さにおいて Alain に優っていたことは、次節によっても察して頂けないであろうか。

それに、必然性を把握し得る精神は、そのことのみによっても必然性の上に出るものに相違ない。必然性は、その本質上、決して直接に与えられない。Alain が屢々強調した二種の必然性、*nécessité de l'essence* と *nécessité de l'existence* の区別は、これまた Lagneau に教えられたものであるが、これらが夫々権利と事実に関するものならば、真の必然性は前者のみと言わねばなるまい。そして、否定の不可能性としての必然性を把握するためには、まづ否定の試みがなくてはならない。いかにも、否定は不可能であり、必然的なものは私たちの力を越えている。然し、企みもないところに事の不可能は知られない。そしてこのことは、さきの *Fr. 63* (53頁) に私たちを送り返す。上位のものは下位のもとに依存する。然し、この依存は、たとえ必然的であるとしても、Lagneau 自身も認めた如く (p. 132), *nécessité de fait* に過ぎないのである。

(1) 二種の必然性の区別は *Fr. 1 (Lettre sur la finalité dans Shinoza)* に述べられており、Alain は *Fragemnts* 発表時の脚註において、この区別の重要性を指摘している (*Rev.* p. 123)

然しながら、ここに僅かに見出された自由は、なお抽象的なものに過ぎない。このとき、悟性は辛うじて理性に傾いたに過ぎず、質料の妥当性に関する懐疑はなお経験に制約されている。Lagneau の *réflexion* は更に高く登ろうとする。なお残る質料と形式の二元性を克服しようとして、形式そのものの根拠を問う。否、行為自体をも含め、質料と形式と行為の三元を統一に齎そうとする。分析より総合へのこの最後の努力は即ち神へと向かうものであり、今や私は難解な *Leçon sur Dieu* についてやや詳しく語ることを試みなくてはならない。

この講義は Kant の第二批判より出発する。即ち、彼もまた *preuve cosmologique* や *preuve ontologique* を不十分とし、神の存在証明を「良心の証言」の上に立てた Kant の偉大を認める。然し、Kant の神はなお外的であったとして、*preuve morale* を「一層直接的」(p. 240) ならしめようとするのである。即ち、Kant の神は道德律そのものの制約ではなく、道德律によって規定された意志の対象の制約であったが、Lagneau は神をこのように *pensée* の外ではなく、*pensée* の内に、*pensée* の底に求め、実に «*par le fait seul que nous pensons quelque chose, que nous croyons qu'il y a quelque chose, nous affirmons Dieu.*» (p. 257) なることを示そうとするのである。この人が常々 *pensée* をその一般性において考えてきたことを忘れるまい。そして、この直接的な *preuve morale* において、Lagneau は Descartes に帰ることとなる。蓋し、Descartes における神の存在証明は *preuve ontologique* に尽きるものではないからであり、他方、*Leçon sur Dieu* の *dialectique* に反撥した Alain も、この Descartes 解釈においては完全に師と一致するのである。

Lagneau はまづ *réalité* に三種を区別するが、それはさきの表における 3 *degrés* に対応している。第一の *réalité* である *existence* は *le perceptible* を意味し、*nature* を形作るが、それは *contingent* であって、神には適合しない。*existence* を理解しようとして、人は第二の *réalité* である *être* に高まる。それは *l'intelligible* を意味し、結局 *le nécessaire* を意味する。故に *loi* と言って

もよく、また *déisme* は神にこれを帰するものと言えようが、Lagneau がこれに組し得なかったことは、さきに *Leçon sur le jugement* について記したところからも察して頂けよう。彼によれば *nécessité* は悟性の形式にほかならず、即ち、なお主観的なものであった。事物自体に対するその妥当性はいかにして保証されるか。そして、Descartes の «*doute hyperbolique*» の意味もここにあるのではないか。Kant の先験的認識論はこの問題への解答であったと思われるかもしれないが、そうではない。悟性の対象は現象に限られるからであり、物自体に関する問題は、弁証論を経て、正に第二批判に送られたのであった。ともあれ、精神は必然性を前にして常にその客観性を疑い得るのであり、このように不確実な *être* は神に帰し得ない。こうして、Lagneau は更に高い *réalité* に私たちを導く。それは何か。曰く、*valeur*。そして、«*Cette réalité appartient à Dieu même ; cette réalité, c'est Dieu.*» (p. 261) と言うのである。

*valeur* とは何か。それは *ce qui est* ではなく、*ce qui doit être* に属する。人はここに *science* と *morale* の相違を考えるでもあろう。また、究極においてそれは正しいが、然し、考察の一般性を決して忘れてはならない。「*A tous les degrés de la pensée, la valeur est vraiment la réalité que la pensée affirme.*» (p. 256) と Lagneau は言うのである (57頁参照)。le vrai は *être* に属する。然し、*vérité* は *valeur* に属する。いな更に、le nécessaire は *être* に属するが、*nécessité* は既に *valeur* に属する。そして、前者は後者を予想する。*valeur* は *être* に関する認識の基準であり、根拠である。権利の秩序においては *être* に先だつもの、というより、これこそ権利そのものにほかならない。そして、これを措定するものは、さきに一瞥した如く、精神の自由な行為であったが、自由にとって、措定することと志向することは何ら異らない。かえって、既に措定されたものを志向するのでは、自由でないであろう。自由は *valeur* を志向する。思惟一般の最高の制約としての *valeur* は固より普遍的であり、ここに Kant の有名な *impératif catégorique* は、単に実践理性のみならず、理論理性をも支配するものとして理解される。然り、道徳法則と自然法則の、単にこの意味における、即ち理性との関係における同一性を理解することは寧ろ易しく、困難は更に先にある。然し、ともあれ、神に *être* を拒んだことは、即ち、神を *inintelligible* とすることである。けれどまた、*valeur* としての神な

しには一切が *inintelligible* であろう。神の存在を対象的に証明することはできぬ。ただ «*Nous nous prouvons à nous-même Dieu en le réalisant*» (p. 283) とされるのである。そしてまた, *valeur* を *perfection* と言いかえる時, —それは正当である—人はそこに *Descartes* を見出す。なぜならば, この人が *doute hyperbolique* を脱したのは神の完全性の観念によってであったと言い得るから。しかも, この *Descartes* 解釈における *Alain* と *Lagneau* の一致を示すためには, 次の一句を引くのみでも充分であろう。曰く, «*Elle [la preuve de Dieu en Descartes] revient à dire que l'âme des preuves est le dieu libre, non point démontré, mais démontrant.*» と (*Les idées et les âges*. 1948. p. 377)。さきに私は *Alain* の平面性を云々したけれども, この人の後期までを考え合せるならば, この平面上には *Lagneau* の立体の各点が射影されていると言ってよい。

以上の *argument* において, 次の如き対応が成り立っていた。

*valeur* — *action* — *liberté*

*être* — *forme* — *loi*

*existence* — *matière* — *nature*

そして, ここにおいても上位者が下位者を照したが, では, 下位者が上位者を支えるか。単なる自由, 自己のみに委ねられた自由は, かえって正に虚無に等しいであろう。然しまた, 自由は自己以外のものに支えられ得ようか。«*Si elle [la liberté] était quelque chose, c'est que tout ce qu'il s'agit d'expliquer par elle existait déjà en elle.*» (p. 269) いかにも, 下位者に対する上位者の依存は事実の秩序に過ぎぬとは言えよう。然し, 今はもはや事実と権利の区別をもって足る段階ではないのである。ここに最後の総合の試みが始まるが, それはまた, 今まで歩み来った途を歩み返すものにほかならない。

さて, *Lagneau* によれば, 資料・形式・行為の如き上記の区別は, 悟性の眼に映るものに過ぎず, あらゆる思惟は, その客観性の条件として, かえってこれらの根元的同一性を予想すると彼は言うのである。«*Qui dit qu'une chose est vraie ne dit pas seulement qu'on aperçoit nécessairement à travers nos propres lois, même s'il y a accord de tous les esprits ; si l'on dit qu'on voit les choses telles qu'elles sont, il faut dire qu'il y a accord entre la sensibilité et l'entendement, non par application, mais par participation au même principe.*» (p.271) さきには質料

と形式の異質性が強調されたのであったが、今やその同質性が回復されようとする。そして、全き一般性を標榜するこの綜合が真に成功するならば、いかにも見事なことであろう。然しながら、私はここに一つの混同を、少くともその萌芽を認めざるを得ない。argument の一般性のためには、上の《accord》は非経験的な認識についても言われなくてはならず、事実 Lagneau は直ちにこれに及ぶのであるが、その際 sensibilité は何と書きかえられるか。nature である。<sup>(1)</sup>この時、誰がこの語の意味を明確にし得ようか。が、不明確はまだしもよい。ここにおけるこの語の使用は、sensibilité もまた nature として把握されていたことを思わせ、また、それはこの語に許された意味の一つには違いないけれども、同時に、それはさきに言われた matière としての nature と異なることを指摘せねばならない。matière としての nature を与えるものでこそあれ、決してその意味の nature 自体ではない。<sup>(2)</sup>そして、nature の概念に関してここに萌している混同は、私の見るところ、続く Lagneau の argument を毒するに至るのである。

ともあれ講義を追って行こう。所期の綜合のため、Lagneau は nature を欲望として把握した上 (《La nature est essentiellement désir.》 p. 275), その欲望の底に一個の予感として横たわる愛を採り出す。そして、「愛の弁証法」とも言うべきものを展開するのである。《Celui qui aime véritablement ne se demande pas s'il aime fatalement ou librement, mais son amour, à ses yeux, implique les deux choses; cet amour, il pense qu'il en a le mérite quoiqu'il ne puisse y résister.》 (pp. 277-8) 即ち、愛は自然の動きのうちにおける自由と必然の和解を実現しているようであり、他方また、愛は l'être particulier の保存を求める如く見えるけれども、その真の目的は l'être universel の保存にあるとせねばならない (p. 279)。なぜならば、l'universelこそ réel であり、le particulier はかえって apparent なものに過ぎぬことが知られるから。こうして、《L'idée de l'amour est peut-être celle par laquelle nous pouvons concevoir de la manière la moins inadéquate l'acte de l'unité divine.》 (p. 278) とされるのであるが、然し、特に注意すべきは次の点である。上の言葉は anticipation に過ぎず、現実には真の愛は存在しない。現実には存在するのは《le désir, plus ou moins compris, plus ou moins justifié》 (同頁) に過ぎない。即ち、愛は欲望という形式の下に生成す

るが、完全に実現されることはない。かえって、完全な実現の不可能性のうちにこそ、愛の真の *réalité* がある。そして、この *réalité*こそ神のものであるとするならば、次の如き驚くべき言葉も、あながち私たちの理解し得ぬものではあるまい。曰く、「A chaque instant la création résulte de l'impossibilité même où est Dieu de se satisfaire de rien de ce qu'il a créé. La création ne peut valoir que par la négation même d'une valeur absolue qu'elle aurait.」と (p. 280)。こうして、愛と自己放棄、犠牲は、創造において、光と影の如く相伴うものとされるのである。

愛は普遍性を目指すものであった。そして、意志とは、愛の現実としての欲望が目的の普遍性において自己を意識したものにほかならぬとされる。更に *réflexion* によって、即ち、事実を離れて権利のみに就く時、意志は自由となるであろう。「L'appétit, la volonté, la liberté sont les trois degrés de l'action par laquelle l'idée de la totalité de l'être sollicite chaque être. Inconscient tout d'abord, l'appétit, par le plaisir et la peine, se diversifie en appétits particuliers qui sont les désirs. Pleinement conscient, le désir est volonté. Quand la conscience est supprimée par la réflexion, on a la liberté.」(p. 288) そして、理性もまたこれらと根源を異にするものではない。理性における普遍性追求の自覚は言うまでもないし、意志と悟性の同一性も既に見たが、目下の Lagneau は更に *nature* まで遡り、理性もまた愛の *acte divine* に発することを説くのである。「La condition de la raison est, dans la nature, sous la forme d'un désir infini qui, s'il se comprenait parfaitement, se renierait lui-même en tant qu'égoïste et s'approuverait comme désintéressé」(p. 282) 但し、ここにもさきと同様の制限であるのは当然であろう。現実中存在するのは理性ではなく知性 *intelligence* であると。(52頁の表に従えば *entendement* であるが。) そして、すべてこれらの制限に、絶えざる *souffrance* (40頁) の源があるが、然しまた、容易に理解される如く、この感情は私たちの進歩にとって不可欠の条件なのである。それにしても、ここで *Leçon sur la perception* 中の言葉 (55頁) を思い出し、それを次のものと比較されたい。「A chaque instant, l'acte par lequel tout être se constitue, c'est l'affirmation de la réalité d'autrui, de son identité avec tout autre.」(p. 281) 然り、単なる知性は他者の存在す



ら確信し得ないのである。いかにも、知性は普遍性を与える。然し、単なる知性の与えるものは空虚な普遍性であり、即ち、孤独にほかならない。知性の力は無力に転ずるのである。実質ある普遍性はいま愛によって与えられたが、実際、人が他者の存在を確信し得るのは、畢竟、愛するが故であると言ってよく、知性が通常この存在を疑うに至らないのは、既に愛と手を携えているからである。——ともあれ、このようにして人は自然より自由に登り得るとすれば、それは自然のうちに既に自由の潜むことを意味すると Lagneau は言い、そして、神は自由の根拠なるが故に、これは結局、自然における神の内在としての「思寵」(Dieu dans la nature, c'est-à-dire la grâce, p. 301) を教えると言うのである。

さて然し、以上において自然 nature なる語は何を意味しているか。さきに sensibilité に関して言われた如く、私たちの内なる自然、即ち、精神の下の諸機能を意味するかぎり、私は上の argument に異議を持たない。けれども、Lagneau はこの語によって私たちの内外双方の自然を意味しているのであり、そして、私はそこに総合ならぬ混同、ないし妥協を見ざるを得ないのである。理性と自由、知性と意志の根元的同一性より Lagneau が外的自然そのものにおける mécanisme と finalité の同一性を導き出す時——これは既に Lachelier が *Du fondement de l'induction* において問題としたものであったが——この混同は最も明らかとなる。mécanisme は知性の形式であり、finalité は意志の形式であるとすれば、知性と意志の同一性より決定論と目的論の和解を図ることは寧ろ容易とも思われようし、また、果してこれに成功すれば、いわゆる神の preuve cosmologique を preuve morale によって照し直すことともなろう。そして、繰り返し言うが、単に人間精神に関するかぎり、私もこれを受け入れる。然し、問題は、外界そのものにおける——しかも、生物・無生物の如き区別もない自然一般における mécanisme と finalité の同一性なのである。いかにも、両者共に個別者の普遍者に対する依存にほかならない。ただ、前者にあっては依存は「外面的」であるに反し、後者にあっては「内面的」とされるのであるが、このような形容は曖昧である。<sup>(3)</sup> 実のところ、Lagneau の argument は、知性を sujet に配し意志をその objet に配することに始まっている (p. 288)。即ち、知性の形式たる mécanisme はなお主

観的であり、その客観性は対象における *finalité* がこれを与えるとするのであるが、然し、このような *sujet* と *objet* への配分こそ、私のついに理解し得ぬものである。なぜ *finalité* もまた主観的ではないのか。普遍者に対する個別者の依存は、「外面的」たると「内面的」たるとを問わず、主観の *idée* なのではないか、——普遍者は知覚し得ないとの理由のみによっても。では、*finalité* は主体によってのみ把握されるとしても客体に属するものとして把握される、と言うのか。然し、それならば *mécanisme* に関しても全く同様であり、一を主体に他を客体に配する根拠はない。とすれば、客体における *finalité* とは、主観の単なる投影でなければ、主体が客体に「身を移す」ことを要求するものであろう。然し、知性は依然として主体に止まるとされる。とすれば、これは主体の分裂であるばかりでなく、結局は主客を同一面に並べるものであろう。私もまた自然について内・外の如き曖昧な語を用いたが、固より、主体と客体は分離し得ない。然し、この不可分な関連は、決してここに言われる如き意味のものではないのである。主客両者を同一面に置くことは、主体をも客体に転ずることであり、それによって真の主体を失うことである。そして、この場合、Lagneau は自己自身——知覚論や判断論における自己自身にも背いたと言わざるを得ない。原因はどこにあるか。それは結局、嘗て彼自身が Spinoza について論じたところにも似て、彼の *sentiment de l'unité de l'univers* にあると思われるのであり、この部分における彼の *argument* は *preuve morale* ならぬ *preuve sentimentale* であると言いたい。固より、この感情は感情なるが故に悪いのではない。dogmatique な感情なるが故に、いな寧ろ、dogmatiquement に解釈されたが故にである。要するに、目下の問題に関しては、これを飽くまでも科学の方法論として考察した Kant の立場（『判断力批判』）を私は妥当とせざるを得ない。即ち、この人は、第三批判においても、先だつ両批判におけると同様、主体としての人間の立場を離れなかったのである。自然法則と道徳的法則の同一性は、単に人間における理論理性と実践理性の同一性の意味においては言い得ても、自然における *mécanisme* と *finalité* の同一性の意味においては言い得ない。そして、Alain もまた、この問題に関しては師を去ること遠かったにかかわらず、この点における師への批判が見られないのはなぜであろうか。ともあれ、上の如き

Lagneau の目的論が、自然に *qualité occulte* を仮托するものとして、後年彼の強く排斥したものにほかならぬことは明らかと思われる。

然しながら、すべて以上のことは、Lagneau 哲学にとって致命的なものではない。なぜならば、彼もまた直ちに主体の立場に帰るからであり、以上の *argument* は要するに無用の挿話と見なし得るのである。《L'être ne peut se réaliser parfaitement que lorsque l'union, la fusion parfaite s'établit en lui entre la nature et l'intelligence.》(p. 289) 人間の立場に帰るかぎり、この言葉にも異論はないし、また、この合一が実現されるのは道徳的行為においてであるとされることも理解し得る。《C'est ce qui arrive par l'acte moral, c'est-à-dire alors que le terme, la fin de l'intelligence, c'est-à-dire la loi, n'est plus saisie comme quelque chose d'extérieur à elle, mais posée comme lui étant identique et comme constituant en même temps le fond de la nature.》(同頁) 故に、真の自由、具体的な自由は道徳的自由であるが、それは単に自由な自由でないのは固より、もはや《action réfléchie par laquelle la pensée se replie sur elle-même pour chercher la justification en elle de l'idée de l'être》(p. 291) でもない。即ち、懐疑ではないが、さりとして、懐疑は消えたのではない。消えたのでなく斥けられたのであり、ここに至って私たちは次の *Fragment* を理解するであろう。《La philosophie c'est la recherche de la réalité par la réflexion d'abord, et ensuite par la réalisation.》(6) これらの言葉は、理論理性に対する実践理性の優位を説くものとも映る。然し、両者は根本において同一ではないか。理論理性の目指す *mécanisme universel* は決して *réel* なものとして与えられることなく、*idéel* なものたるに止まるし、他方また、現実に理性は存在しないとすれば、まして自由も存在しないと言わねばなるまい。にもかかわらず、実践理性に優位が与えられるのは、両理性における *matière* の資格の相違によると私は解する。不可欠と不可避の相違と言おうか。即ち、理論理性にとって *matière* は対象であるが故に、そこにおいては認識の結果が問われざるを得ないに反し、純粹な実践理性にとっては、Kant の強調した如く、*matière* は否定されるべき契機であり、動機のみが問題とされるからである。

以上私は、私の理解し得えたかぎりにおいて、Lagneau 哲学の要点を述べることを試みた。言葉は甚だ至らなかつたけれども、今や次の *Fragment* がこ

の哲学の適確な要約であることは理解して頂けよう。それを掲げて私は Lagneau に関する記述を終り、この哲学の決定的な影響の下に成った Alain の諸論文に移らねばならない。《Aux yeux de la raison, c'est-à-dire analysé par la réflexion, le monde est le phénomène par lequel se représente à l'entendement dans un Moi personnel le rapport d'union et de dépendance qu'il soutient avec la totalité des êtres sentants qui participe avec lui, mais inégalement, à la vie de la pensée unique et divine, qui dans son fond est liberté et amour, c'est-à-dire esprit, action pure et parfaite.》(2)

- (1) 《De même pour une proposition exprimant une vérité d'ordre idéal. Dire par exemple que quelque chose doit être, c'est dire que cela est vrai absolument, c'est-à-dire que cela est vrai pour tout esprit. C'est donc impliquer nécessairement une nature commune dans tous les esprits, et aussi un entendement, etc.》(p. 271)
- (2) ここに言われる sensibilité は明らかに52頁の表におけるものではない。この表を守れば, représentation ないし sensation である。そして, これらの語はいずれも作用と対象の両面を意味し得ることにより, 正に二重の意味において nature に属している。然し, そうとすれば, Lagneau がこれらの語を用いずに sensibilité と言っていることは, かえって一層よく, 当面の問題が「内的自然」にあることを示すものであろう。他方また, sensation は感覚内容として「外的自然」をも意味し得るとしても, その fictif な性格(54頁)を忘れなければ, nature の概念の混乱は避けられ得たのではないか。
- (3) この間の対照を最もよく示す句は, 思うに次のものである。《Notre être véritable consiste dans l'unité de notre action interne d'une part, et, de l'autre, du système des actions que nous exerçons sur le monde extérieur et des réactions que nous en subissons.》(pp. 286-7) そして, 《notre être》に関するかぎり, ここに異論はあり得ないが, 問題は, notre être より直ちに être 一般に移る点にあるのである。
- (4) 《La véritable cause de l'évolution des êtres c'est le sentiment qu'ils ont de l'unité de l'univers duquel ils font partie, etc.》(p. 286) 他方, Lagneau は *Notes sur Spinoza* において特に Spinoza による神の存在証明を検討し, それは論証的な外見にもかかわらず「直観」によると結論したのである (*Rev.* pp. 402-16)。

(この章未完)